

真生

第三卷 十月號

□吾人が永遠の生命を要求するのは自己の本質が宇宙の生命に歸一せんが爲めである。而てそれは本來不死のものではあるけれども、各自の生命が永遠の生命として自覺するが爲めには死といふものが一大覺醒の堺をなすに都合よいものである。

□無限の向上を吾人が要求するのもやはり吾人の生命が宇宙と一となり宇宙と共なる向上に至るの要求に外ならぬ。

□而て此の二者の要求は天地と共なる眞人の要求として、やがては自らに天地の理想を實現せずにはゐられないものとなる。

□而も其の初めたるや吾人の自覺が未だ充分でない時には排他的利己主義の生活である爲めに、生は死となり向上も墮落の姿であるものが、如來に歸命し、天地の大道に一致せんとするに至つては救いの生活となり、遂には自ら神としての生活をも要求するに至るものである。

□此の意味に於て、自己そのものが直に宇宙の現はれ宇宙精神の表現として覺佛體現するに至るのである。

□普通の信者は前者に屬し、解脱の佛者は作者に屬する、此の意味に於て吾人が佛教を信する限り最後の目的が後者にあることは勿論である。(念)

目次

◆一擲萬曳	越
◆深信就 ^て 反省 ^三	土屋 觀道
◆悔懺錄 ^(二五)	演 阿 彌
◆老坂の新路	七十四翁佐藤
◆宗教座談	藤井 貞邦
◆觀道より	

△佛を拜んでゐる人は多いが、佛から拜まれてゐる人は少い
 △闇に鐵砲を打てゐるやうに、的の的らぬは問題でなく打て
 るの音を聞いて勝負け自分の問題でなく支那の傭
 兵のやうに戦つた喜びである。たい戰て居れば宜い、信じて居
 五圓貰へる事が都合が悪くなれば軍服を脱いで逃げ出すだけ
 お稲荷さんや金神様に乗換へる丈けの信仰がある。
 △佛を信じてゐるとは言ひながら、信じてゐると思つてゐる其
 想ひだけを功にして闇と相談してゐるやうな儂い信仰がある
 佛を拜んでゐるとは言ひながら、拜んでゐる自分だけがあつ
 ても對手の無い無交渉な信仰がある。
 △而し誰れもしふ確信を得ないものは満足出來ないだらう。
 〇「神を試る勿れ」とは言ふものの、神は總ての者に盲目で居
 れといふのでは無い、總ての者から神隠れしてゐる者ではな
 く、試みない時に現はれる神である。
 △だから佛から拜まれてゐる人にして初めて眞に佛を拜んで
 ろる人である。
 △併しそれだけじゃ佛と我とは二人になつてゐる、陰極があ
 るが爲めに現れた陽極であり。此二極の電氣は相牽き相制し
 てゐるといふ丈けの相對關係である。靜止の儘で持ち張てゐ
 る二つの力に過ぎぬ。
 △眞の活動は二極が火花放電して中和したところにある、即
 ち陰極が陽極の中に入り、陽極が陰極の中に入つたところに
 陰極の力が現はれる陽極の力が現はれてゐる。二極の無くなつ
 たところにて二極が眞に生きてゐる、お互に力になり合て新し
 い一つとなつてゐるのである。(尅)

多くの人には、佛に觸れたいものだ。佛を逐ひまはしてゐる。或は既に捕へた人は、此佛を遁してはと。非常に苦勞してゐる。さもなければ佛とも氣附かず。五十年蛇のやうにノタツテ終る人である。佛を探してゐる人は、心から佛に合掌出來るやうになりたい、そして歡喜の生活をした。佛の奴隷になつてゐる。佛を得たと云てゐる人は、其實自分の放慢を辯護するもの。佛の都合の良いやうに、佛を仕立て、それを拜んで居り、そして信仰が出来たやうに思つてゐる。だから自己の破綻を彌縫するが爲めに時々應じて佛を造り更へ佛を善い人にしてゐる。併し眞の佛との關係は、此變佛の奴隷になたり、佛を奴隷としてゐるやうな對立關係でなく、佛と同格となり、自分の衷から湧いて來る佛で無くては嘘である。自分の上に高く在ます佛とは、自分の裡から抽出せられた佛の事である。決して奴隷的關係ではない。骨折て捕へたと思つてゐる其佛を、思切て捨てる事だ、拜がむ事を己める事だ、それは淋しいやうに思へる、恐ろしいやうに思へるが其時、自力で造つてゐた化城が破れ、佛が死んで、本然の如來が無限に自己の裡から流れ出して來る、祈る事すらも要らなくなつて祈りそのものが湧いて來る。拜がまれる佛が失くなり、拜む自分がなくなつて眞の佛が飛出し、眞の自分が生れる。此如來藏に入て法藏も本願も信心も悉くが浮いて來る。そして其一々を通じて什れからも眞實の世界が覗かれる。そして無礙に何れの問題へでも抜ける。總ての底には純一白道があるのみである。その白道が二河三河、無量河で常に妨げられてゐる。而も一道の上に足を就けられた人は水火に煩はれずに平然として歩いて行ける。佛を背負つた生活では却て佛が手足纏ひである、佛を肛とした自分であるときに、少しの屈托もなく自由に大手を振て總てを踏み破て行ける、何んな事に面しても少しも動ぜず打開して行ける。此眞實の力生に還る事が南無阿彌陀佛である。

(尅子)

深心に就ての反省 (二)

二、信機への轉向

土屋 觀道

然に或る人々は申します。「吾人は生れ乍らにして佛性を有す、而てこの佛性の發現か即ち向上の心である。故にこの向上の心が即ち成佛したいとの心であつて、それが即ち發菩提心である。故にこの心のまゝに動きさへすればよいのであつて、其の心のまゝに動くことが即ち菩提心の活動である。然らば吾人は此の活動の外に何を要しやう、其の心のまゝが即ち佛心の活動であり、此の働きをこそ佛作佛行ともいふのである。それに何の必要あつて信機だの信法だのとわづらはしくさわぎたてるのか」と、而て之が主として自力門に立てる佛教徒の人に多いのであります。而て之には又一面尤な點もあるのであります。

乍然そこが聖道門と淨土門との分岐點かも知れません。否。若しさうでないとしても、今一步そこに考へ來るところのものは此の理想に對する私共の行爲の反省であるのであります。何となれば私共の理想は空想でない限り、必ず何等かの方法を以て其の理想の實現を如實に要求するものでありませう。そして若しそれが實現を要求されないやうなものでしたら、それは所謂空想に過ぎないものでありまして決して私共の間に理想といふべきものではありません。從て私共の心は其の偽らない意味に於て自分の心に欲するものは自ら之を自分の手にしたいと望むのが本當であり、其の本當に望む所のものはやがて自分の理想として之を實現したいと其の方法を構じ、又其の方法によつて之を現實しやうとするこ

とは又當然のことであります。從て此の念佛のことにつきましても、私共が眞に生存の意義を考察し、人生の價値を批判して、そこに聖なる世界を如實に實現しやうとするならば、此の眞實の理想を如實に體現してゐると信せられた諸佛菩薩の如くにありたいと云ふ事は當然であり、從て此の心の眞に起り得た人々、若は起つた所の人々はやがて此の理想實現の方法と其の實現の實行へと自ら之を着手するといふことは又理の當然ではありますまいか。否、現に此の至誠心あるものは必ず其の途に出づべきでありまして、又其の途に出でた所の多くの眞面目なる先覺を現に此の世の中に幾多見ることが出るのであります。而て私は其の實行の最も顯著なるものを我が善導大師と法然上人の上に見るのであります。然に其の結果として、果して彼等は直に自分の理想そのものを如實に實現することが出されたのでありませうか。私には悲い哉、否と答へざるを得ないのであります。乍然此の否の一字こそ眞に私共への救いの一字でありまして、他力淨土の眞門は正に此の一點からこそ光を發すべきであるのであります。乍然此の否の一字こそ、又ともすれば私共が永劫に悩む所のものでもあるのであります。何となれば若し私共に此の成佛の理想が此のまゝに直に實現できるものならば私たちは何等の苦痛もなく之を實現し其の理想實現の喜びを受けることが出来るからであります。否よしそれが甚だその實現に困難であるといひたしましても、結局自分の力でそれが出来るものでありますならばそれは自分の本心の願いとして、人生としての生涯である限り如何なる困難ものともするものではありません。而もそれは單なる五十年や百年しか生きない肉身よりも更に尊いものである限り、私共は其の生命さへ決して惜むものではありません。否々それどころではない、私共の眞の生命は何の爲めの生命でせう。むしろかうして自分の身

體の健康を維持することも、或は又此の身を養ふ經濟的欲求も要するに此の價值ある行動の爲めに一身を犠げんが爲ではありますまいか。靜に考ふれば私達の價値の生活はこの外に眞の意義ある生活を發見することは出来ません。さうして又さうする外に眞に自己の本心の満足する世界もないのであります。

乍然、讀者よ、私共は果してどれだけか此の眞實の私共の理想が如實に實現せられてゐることでありませう。私共は今少しく此の事實を實際に深く日常の生活に反省せなくてはならないのであります。それに就ては私共の行爲そのものを此の理想に照して親しく反省することが最も簡易であるのであります。即ち自分の行いを此の理想の行爲に照して見るのであります。然に自分の理想とは何であるかそれは永遠の生命と價値ある生活であります。いはゞ諸佛に等しき佛としての行爲であります。然に今日の自分の行爲は果して諸佛に等しき佛としての行爲でありませうか、佛心とは大慈大悲是也とあります、從て佛作佛行は此の大慈大悲の心から起つたものでなければなりません。然に私共の日常の行動は果して之等の諸佛に等しき大慈大悲の佛作佛行となつて現はれてゐるのでありませうか、即ち此の理想と此の現實を如實に比較して來るところに、眞の私共の自己生活の反省が明にせられるのであります。さうでなければ私共は一體何を以て私共の行爲の善惡を批判することができませう、即ち善惡批判の標準が定められない限り、私共は自分の行爲の善惡は本來定めることのできないものとなるのであります。從つて理想なき人々には眞の善惡も別らないことになるのではありますまいか、自分の善惡さへ判らぬものがさうして又人の善惡が判りませう。從て世間多くの人々の善惡の批判は此の立場から見ますれば隨分勝手なきめ方で多くば其の場その場に於て自分の都合から自分にはよいと思ふことを善となし、自分に

都合の悪いと思ふことを惡となしてゐるに過ぎないものであります、從て甲の人と乙の人と其の利害を異にする場合には其の善惡の標準が全く正反對になることもありまして、其の中立にある人は何れを是とすることも出来ないものになる事情も多いのであります。否ればかりではありません、自分自身のことでありまして其の何れをとるのが眞に正しい道であるかと其の選擇に迷ふことが多くあつたり、又自分の心がさうすることが從來からの道徳であると知り乍ら何となくそれでは自分が立ち行かぬやうな氣がして、之が實行をきらつたり、又さうすることが自分の爲めばかりでなく人の爲めにもならないやうな氣がする時もあります。

斯くの如きは實に私共の實際の行爲を深く一々に反省すればするほど其の多くを發見するものであります、遂に彼親鸞上人が自分自身の行爲に對して其の反省の結果、何れが是か何れが非か、其の公正の標準も判らないほどの自分であると歎かれ、而かも其のなすこととして佛作佛行とも思へない、私利私慾の自己心に心亂れて悲泣せられた有様は人事とも思へぬ悲しみの極みであります。さうして一度そのことを私共自身の生活にあてはめて考へて見たならば如何でせうか。凡そ誰れ人か此の親鸞上人と同じ歎きに立たない人があります。さうして其の自分の心に對して誰か眞からその罪に泣かぬものがあります。自身は現に是罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し恒に流轉して、出離の縁あることなしと歎かれた善導の御言葉は決して人事ではないのであります。

靜に思へば我祖法然上人が道を比叡の山に求められて、十六の御歳から十八の御歳までに法華經の三大部を讀まれた時、如何に人生の理想にあこがれ給ふたこととせう。釋導出世の本懷が此の法華の理想にあり、其の出世大事の因縁が一切衆生佛智見の開示悟入にあるといふことは、迷つた小供の其の親に會ふ如く、人生最高の理想生活が自己の本佛たる如來の一子であることを悟り、如來と等しき自覺を以て如來の世嗣ぎとなることだと知らるゝに至つて、宗祖の喜びいかにばかりでありませう。まして、御年

十八才、天をも貫ぬく人生の理想にあこがる、青春の時、死も亦辭せぬ上人の理想こそ、思い出すだに私共の若き血しほを沸かしむるものではありませんか。あゝ人生の理想何を以てか之に勝る最高の理想がありませう。思へば血も沸く喜びであります。

「人はパンのみにて生くるものにあらず」とは彼のキリストもいはれし所、實に人はパンのみで生るものではない。今や上人は人生の最高目的たる成佛の理想に確然たる自覺を以て立たれて來たのであります。戒定慧の三學何ものぞ、死も亦辭せぬ上人の心には、今や献身の大業は晃々として輝いたことでありました。噫然乍ら、宗祖の心は果していつまで此の喜に充されたことでありませう。思へば血も氷る人生の悲みであります。さうしてそこに間もなく來たものは、自分の力では此の理想の實現は出來ないではないかとの絶望のヒラメキがあります。否實現どころか實際自分の行動は自らも豫期せぬ罪惡の行爲のみ、むしろ自らも豫期せぬ貪慾の起るのを如何いたしませう。さうしてそれが如何に自分の豫期する理想を裏切ることよ、自身は現にこれ罪惡生死の凡夫！、三學はおろか戒學の一つさへたもてぬではないか。してみれば自分の此の至らざるなき惡徳の行爲、むしろ自分は非人格者そのものではないか、さうして此のまゝに一生を終るならば人生の一生は何を意味することであらうか。そこには只絶望があるのみでありました。而て宗祖の苦しみは亦萬人の苦しみであります。道を求めて未だ得られざる宗祖の惱みは涙なくしては私共の讀むことのできぬ宗祖の惱みであつたのであります。さうして之は又支那の善導の衷心からの歎きでもあらせられたのです。さうして亦、私共自身におきまして、眞に如來の大悲に救はれない限り、又永劫に悲しむべき人生の最大悲哀ではありますまいか。人生は道に入らなければ只絶望あるのみであります。如來を知らずしてどこに人生の理想がありませう。念佛を他にしてどこに救いがありませう。あさましき人の心よ、私達は今一層の自己罪惡の反省を要すべきではありませんまいか。

(八、二、御殿場にて)

懺悔錄 (廿五)

演 阿 彌

常に私を愛し給ふ私の如來様よ。懐かしい上にも懐かしい如來様は常に私の爲に斗り盡くして居て下さいますにも拘らず私は却て斯の如く懈怠の心を以て如來様から離れんとして居ります。隨て其矛盾から來る惱みが段々強くなつて苦しい灰色の日が幾日も幾日も續くのであります。此頃オーガスチンやトマスアケンピスなどを愛讀しました關係からではありませうが私の思想は全く中世紀的倫理觀念に支配せられて一層山に入つて仕舞はうかと何邊思ひ悩んだか判りません。殊に七十年間も瞑想的神秘的禁慾生活を續けたトマスアケンピスはすつかり私の心を奪つて其のどの言葉もどの言葉も一つ一つ私を引付け私を傾かしめたのであります。此位私を動かした書物を嘗つて讀んだ事はありません。彼は云ひました「未だ全く己れに死なざる者は忽ち誘はれ少なき些かなる事にも負くるなり。多くの物汝を煩はし又屢々汝を亂

すは之汝が未だ全く己れに死せずまた凡て地のものより離れ居らざるに依れり」と。善くならんとしでも中々善くなり得ない私、夫は耳四郎の心理と同じでありますが、夫は本當にまだ自分に死切つて居ないからだど一大痛棒を與へられた時私はどんなに悲しんだでせう。「天性陷り易き惡より強いて我等を遠ざけ而して最缺くる所の善を獲んとして熱心に努むる」と雖も「噫々我努力の貧弱なるぞや。われは全く心煩びより免るゝ事甚だ稀れなり」而かも「信仰の爲め或は兄弟の爲めに時として定め修業の一を省く事あるとも後に容易く回復するを得ん。されど厭ふ心又は怠慢の心よりして輕々しく此を廢せば是れ咎にして又有害なるを覺ゆ可し」。アツケンピスは本當に私達と同じ經驗を持つた恐ろしい人です。ヒシヒシと胸にせまる苦しさを與へるんです。「何の爲に汝は召されたりしやまた何故に世を捨てたりしやを屢思ふ可し。之汝が神の爲に生き靈につける人とならんが爲に非らざりしや」。日に幾度となく反省の涙にむせぶ事は寧ろ一種の信仰心理とは云へ餘りに苦しい虐げで

あります。「汝若し冷淡になり始めれば是れ惡しくなり始むるなり。されど汝もし身を投じて熱心にならば大なる平安を見出し且つ神の恩寵と又た徳を慕ふ思ふに依りて勞苦の輕くせらるゝを覺ゆ可し」。精進は一切の事業に於ける成功の母である事は知り過ぎる程知つて居るのでありますが上求菩提丈で下化衆生と云ふ方面の熱心さが無ければ所謂片輪の精進に過ぎない。併し其片輪の精進の中に大なる平安大なる満足があり得るでせうか。然る私には下化衆生と云ふ強い氣分は本當に起きて居りません。唯だ自分の菩提を求めやうとする心で一杯なのであります。此故に此二つの心即ち菩提を求むる心と其求める事が片輪なものではあるまいかと危ぶむ心とが渦を卷いて兎もすれば愚かなる私を何時の間にか「汝自らを 忽諸に」するものですから何時迄たつても進境が見えないのであります。我等のうちにある光はいゞ微かなり而して此をも我等は怠慢に依りて速かに失ふなり噫々本當に情けないではありませんか。然し然し私が今ま如來様を見失つて居るならば本當に重大

事であります。私は如來様を見失つて居るでせうか。否な、私は怠慢になつたけれども決して見失つては居ないつもりです、私が瞑想する時、私が念佛する時、如來様は何時でも私の眞正面に直感せられて在ますのですもの何で見失つて居るものですかと考へて居たのです。今之を反省しますれば怠慢になつた丈それ丈如來様に背いて居つたですが、智恵暗くして何とか理窟をくつ付けて辯護して居つたのであります。其癖或は泣き或は悔み或は悲しんで、然も夫れ丈御念佛から遠ざかりつゝ毎日毎日をケンピスと共に暮らして居つたのであります「こんな暗い日が半年斗りも續きましたでせう。それでもかう云ふ歎きが私一人のみでない事も教へて呉れたので一分の慰めもありました」慰藉汝より奪ひ去られたる時直に失望する事なく謙虛と忍耐とを以て天よりの眷顧を待つ可し。之は神は再び夫よりも廣大なる慰安を汝に與ふ可ければなり、而も是は神の道に經驗ある者には新奇の事には非らず。そは大なる聖徒にも斯くの如き類の干満ありたればなり。されば弱くして憐む

可き我等はたとひ時としては熱烈に時としては冷淡なる事ありとも心を落す可きにあらざるなり」と云つて居る處を見ると聖者と雖も決して私が想像に畫がいて居る様な者ではないかも知れませんが都合に依ると私は人間の企及し得ない心境を理想して然も超人たり得ざるを惱み苦しんで居るのだからかも知れません。然しそんな批判は何れにあれ感情的に總ての理窟を越えて最大最勝最善美なるものをつかみたいのであります。而して夫を掴むには少し位の犠牲を拂はねばならぬ事も覺悟の前であります、然も己が非力を思ふ時矢張りケンピスと共に「あゝわれ心に天のものを思ひ廻らす時内心に苦しむ事如何斗りぞや。またわれ祈る時直に肉の思ひの群われを圍むなり。我が神よ。汝我に遠ざかり給ふ勿れ。汝の電光をうち出して彼等を散し汝の矢を放ちて仇の虚しき念ひを凡て惑亂せしめ玉へ。我心を汝に立ちかへらしめ我をして凡ての事を忘れしめ給へ。汝永遠の眞理よ、我を強め虚妄をして我を動かす事無からしめ給へ」と祈らざるを得ないのであります。如來様が私の心の

中に一杯でましますならば屹度屹度心からなる満足を得て自分にすつかり死に切る事が出来るでせう。「凡てのものを棄て己れをも棄て而して全く自愛の痕跡を少しも止めない」様になり得るならば其處に無爲涅槃の境界が展開せらるゝであらうとの想像がよし中世紀的な思想から將來して居つても決して眞理にはづれて居るものではないと思ひます。此故に私の日常行爲の心理がうまい物に着しよい物に著するのを悲しく思はざるを得ないのであります。事實うまい物はうまいし面白いものは面白い。之を曲げる事が今の處とても出來相にありませんけれども、うまいと思つて喜びよいと思つて樂しむ其心境は畢竟生死流轉の姿であらうと思ひます。純粹經驗のまゝに自他の相對的觀念の起らない心狀を相續する事は出來得難い迄もせめては事毎に如來様の恩寵を呼び起さねばならぬ筈ですのに夫を喜び夫を樂しんで居る愚かな私を思ふと本當になさけなくあります。「いよいよ己に死するに従ひ益々神に向ひて生き初むる」事は全く想像するに難くありません。然し乍ら古への

多くの先覺者が此處をどう云ふ風に切り開かれたものでせうか。聖者達と雖も人間性を具備して居られない筈はない。矢張り高等なる心情と共に劣等なるものも持つて居られたでありませう。而して其劣等なるものを調伏し高等なるものを啓發せしめた其心的過程を委しく知りたいものです。日常の事物に觸れ行く情意の動き方を精細に知りたいたいものです。ケンピスの云ふ如く「日毎に死する事の外、他に生命と眞の心の平和とに到る道ある事なし」と云ふ事が眞であるならば或は私は絶望かも知れません。然し日毎に死ぬと云ふ事が無感覺な無神経状態であらふとは思はれませんが「肉につき官能につけるものに心若かれ」る事を悲んで居る處を見ると感覺の後に起る愛欲の觀念を否定せんとしたのでありませう。夫は東洋の澤山な聖者方も随分惱んで其處を首尾よく切り抜かれた様であります。傳記に傳へられてある其儘を全然肯定する事は出来ませんけれども、此問題の解決がなければほんとに落付けるもので無いのですから此點に關して作者傳記が留意して呉れたらばよ

かつたらうに思はざるを得ないのであります。無論聖道門の聖者と淨土門の聖者とは修養の中心點が異つて居るのでから其心的過程も違つて居りませうけれども解き放たれた安らげき心狀の自覺は恐らく均しきものであらうと思ひます。此故に此の二つの行き方、殊には淨土門の聖者方の心的過程を委しく知り得るならばどの位私達の參考になるか判らないと思ひます。是れ人事ではありません。全く私自身の命懸けの問題であります。とにかく現在の私自身が私に十から十迄倦き足つて居るのです。私は何も聖道門の聖者の様にならなくともよいけれどもせめて私の三業四威儀の凡てが善惡共に如來様の大きな御慈悲を中心として所作されて居なければ本當の満足はあり得ません事を思ふ者であります。然るに私の所作は事毎に如來様から離れて事其事、物其物に一つ一つピタピタと引き行く醜さ、本當に其淺ましさを眺めると胸はかきむしられるのであります。嗚呼。

(續)

老坂の新路

七十四翁佐藤生

古稀の齡にして無限絶大の新路を獲得し人生の意義を味ひ、齡ひ老ひたるも老たるにあらず、之れ小我の老たるなりと歡喜勇躍の日日を経過する。略歴を述べて土屋上人足下に感謝の意を表す。私は久敷朝鮮京城に居住して終局屍を其土に埋め、同地に於て佐藤家初代の人となる決心なりき、而て大正九年十月不圖思ひ起せしは拙老此地に渡航せしより既に二十年の星霜を経過し、齡七十の翁となれり、故郷竹馬の朋友は大半現世の人にあらずるも年少の知人猶多々あり、第一氏神に他郷に埋屍の罪惡を謝し、且つ他人に貸與しある舊宅の處分を爲さんと然り。今直に行べし、今日ならば旅行に何等不自由を感じざるも今少しく經過せば身體の自由を失し、旅行も亦難かる可しと、其意を家族に示し故郷に滞在するは一ヶ月以内の豫定を以て十一月五日京城を出發せり、九日舊里佐屋に歸着親族に止宿す、同夜は深更を本村の事狀を尋

問するに二十年前見送を受け驛頭に別を告し人々は十中八九現世の人にあらず、黒宮平八氏の前代とは格別の懇親にして、桑名驛迄見送を受け車中將來家政上の大意を交話せし人なるも、今は其面影を偲ぶ、而已、翌十日舊知は勿論往昔餘を懇意にせざる人も陸續來訪無事歸郷を祝賀す、其の情の濃なる故里の温さを味えり、該時歸郷偶吟として一首を賦す「鷄林經歲廿餘回。白髮飄然歸去來。郷土溫情其如密。度山依舊笑顏開」一度山在舊里西三里稻多度山。同日午後黒宮平八氏を訪問す夫婦共依舊深切悲話喜談長時間なり、而て同氏曰く不圖せしことより本年五月名古屋崇徳寺に於て土屋觀道上人と申す大徳に拜謁し、法話を聽聞して佛法の貴重なるを知り、十九日間各所の寺院に隨行し、稱名念佛を修行せり、爾來從前所好の釣魚初め種々の惡戯を速に廢棄して念佛信者と成れりと、夫は結構なり而て其高僧の來歴を詳述あらんことを請求す、同氏曰く土屋上人は百萬遍法主の愛弟にして極力聖典を研究し、且つ大徳の山崎辨榮上人に隨身して其大徳の信念する佛法の奧義

に通達し現代稀なる高僧なりと茲に於て始めて辨榮上人と觀道上人の尊名を承知するを得て自然敬慕の念を生ぜり、而て何か上人の著述せられし書籍あらんと尋ねしに、大靈の光と如來光明禮拜儀を示し、且つ曰く辨榮上人は來錫の期なきも觀道上人は來廿一日頃來光を蒙り、說法あらんことを依頼し承諾を得あれりと其夜再三兩冊子を拜讀するに十分に意義を解する能はざるも、是れ迄私の思慮せし處とは其趣を異にして、之を是れ真正の佛法ならんかの感を生ぜり、扱て私の家の宗旨は眞宗東派にして還歷の順より時々正信偈を讀誦すと雖も何等其意義に留意せず、本尊に禮拜する際の形式なりと思ひ又適々寺院に參詣して説教を聽聞するも朝鮮は新殖民地なるが故か、忠孝五倫の道を解く楷梯に等しく、或は極樂國土の莊嚴を解も老夫老婦に一時の慰安を與るるの方便ならんかの思ひあり、元來私は少壯時代漢學の門に遊びし頃同窓の恒に交話せし所の人間絶命すれば魂は上騰して飛散し、魄は地に歸して土と成る靈魂の滅不滅は到底人智の理解する所にあらず、我心正

義にして權利義務を確守し社會に害毒を毫末も流さざれば伏仰天地に恥じず、獨立不羈の一良民たり、富貴貧賤は天運の然らしむる所何程精神を使役するも終に徒勞水泡なるの信念にして、老齡に到るも猶ほ依然たりき、舊作あり「口誦易矣自由權。實行難哉自主權。正義不妨他權利。即離自主自由權」然るに還歷の齡に達し何となく物淋しき感を來し、時々佛前に禮拜稱名し寺院に參詣して説教を聽聞するも前記の通りにして何等益する所あらざりしなり、然り而て今回辨榮上人の冊子を拜讀して何となく寂寞を脱する心地せり一兩年以前は本村阿彌陀寺え辨榮上人折々來錫ありて長日子說法ありし趣なるに依り同寺に參詣して法理の大義を聽聞し、且つ兩冊子の不解の個所を質問せんと同寺に到り主僧其意を通せしに辨榮上人は稀有の大徳にして釋尊一代の聖典を通曉し、法理を深切丁寧に長時間詳述せられしも聽聞の間は如何にも結構にして感に堪ざるも後に到れば記憶なく又禮拜儀は讀誦の節を修習せしも其意義に留意せざりしと夫より同上人幼時より行業著しき逸話

あり而て如何なる原因なるかは知らざるも如斯高德の聖人なれども本宗寺院大半の僧侶は異安心として敬遠の狀ありと、其時私の心に異の壹字が非常なる響を來し異安心とは面白し結構なり、是は之れ眞正の教理ならんと土屋上人の來光を待つ一日千秋の思ありき、其間思考す自力難苦の行業は到底老體の堪ざる所拜謁の際先決問題として之を問定せんと、期日來錫の通知を得直に推參して拜謁を遂ぐ、溫厚篤實威而不猛恭而安の風姿あり第一に問私の家宗は眞宗東派にして同宗僧侶の説に依れば淨土宗は半他か半自力かにして行業を要すと果して然るや上人曰く。然らず宣傳する所の教理は純乎たる他力にして大悲の阿彌陀佛に歸命し念佛爲本にありと思はず歡涙溢胸其坐に堪ず退たり、其夜より三日間晝夜懇篤なる法話を拜聽するに從前思慮せし教理とは全然其趣を異にし是を之れ正眞の佛法なり、如斯人生の生命たる佛法を忠孝五倫の楷梯或は老夫老婦の慰安等と思慮せし頑愚慚愧に堪ず、爾來佛門に歸入す可しと茲に心機一轉せり賦一首「說古談今總至誠。一場法雨六

根清。七旬長夢覺醒去。認得東天曉色明」今回の法話に於て大旨は心底に徹せしも事々物々多くは初聞なるが故一々了解する能はず、爾來獨堅聖名を稱え時々黑宮家に於て別時念佛に參加し傍ら佛書を拜讀せり、翌十年初春思考するに朝鮮出發の當時は舊里に滞在する長して一ヶ月との決意なりしも如何に幸福なるか佛門に歸入する事を得て人生の人生たる大義を觀悟する惠光の端緒を得たるも再び朝鮮に渡航すれば指尊を仰ぐべき善知識もなく四圍の境遇に依りて稱名念佛も退轉するは必定なり、然す宿志を變更して故郷に永住し畢生佛法を修養するを老體の本務とす可しと決心し、其處理を施行せり、教典拜讀中無始以來罪惡深重にして今猶日々犯しつゝあることに氣付嗚呼如何に我は愚劣なりしか少壯時代より古稀に至る今日迄獨立不羈の一良民なりと平然生活し來りしこと慚愧に堪えず涙に咽ぶ外なきなり、五月中旬名古屋崇徳寺に土屋上人の至誠懇篤なる法義を聽聞す法話中名體不離の詳細なる説明あり、以後行住坐臥稱名を惰らざることを心掛け、且つ教典を拜讀

するを専一として経過し來れり炎暑中賦一首「何苦炎氣夏日長。身心不動自清涼。壁間一軸尊名下。獨坐譚稱十二光」歸鄉以來親族方に寄留し居しも故里に永住と決心せし以後舊宅に獨棲自炊せんと思ひ拆舒相談を試みしも獨住は可なるも自炊は到底永續し難しと親族知友同意を表するものなかりき、然しながら私の移住せんと欲するに三つの理由あり第一稱名するに聲の高低時の早晚に關し他人に對し心酌するの憂なきこと。第二自炊すれば自然運動す運動すれば自然身體を強壯にするこゝと、第三人身は何人と雖も其身分に應じて不知不識の中に何程か社會に貢獻しつゝあり、然るに今私の爲に他人を使用すれば其人の社會に對する貢獻を殺ぐ道理にして老弱の自分何等貢獻する能はざる上に又他人の貢獻を妨害するは社會に對し其罪輕からざること、此三理由の基に口外はせざれども斷然決意十月初旬舊宅に移轉し、獨棲自炊を實行せり作一詩「起居隨意世途安。獨住閑園風月寬。多幸身心無一病。稱名聲裡理朝餐」同月中旬多度山養春院え土屋上人來錫五日間晝夜の法話を

聽聞す、説教中五根五力七菩提分八聖道分の詳細なる説明且つ大悲本願の要旨を懇篤に教示せらる爾後非常に修養力を増進せし感あり、或日念佛中身體に波動を生じ、無念無想微妙の境地に至る歎涙潸然拜伏す、其心味不可説なり爾來念佛中時々同感を享受す賦一首「三業無間果不空。此涯彼岸至心通。煩雲惱霧自然散。身在光明赫々中」教典を研究するに好侶伴なきを物足らざる事に思ひ居りき、幸なる哉大正十一年四月舊知眞野觀光氏佛門に歸入せらるに會す、同氏は二十年間佛教を信仰し斯道の聖典は殆んど涉獵最も漢歐の學識あり且つ稀有の精力家にして三ヶ月間に法華三大部を讀了さる同氏時々來訪相互に質問應答教義を研究す、之に依りて多大の讀書力を増進し日々愉快に経過せり、爾來は著しき身餘に翼動思潮に變遷なきを以て略歴として記述するに由なく龜の歩に等しく遅々一步一步向上畢生中止せざるを期す、賦一詩「冬寒夏暑老軀平。寢夢清邦 稱名。獨住蓬扉無一累。大慈光裡送餘生」常に事の遺憾あり少壯時代今日の信念ありしなれば極力社會に奉仕し

佛作佛行應分の貢獻を爲せしも如何せん老弱の身體悲哉々而て之も亦愚痴なりと隨懺し、青年に對し佛法は老人より以上少壯の人の信向すべきものなることを話柄とせり土屋上人足下、大正九年初冬足下の至誠なる教誨に會せざれば終生佛門に歸入すること能はず、自今朝鮮に於て物淋しく消日六道流轉の人なりしなり。大慈大悲の招換に因り

足下の至誠なる法話を聽聞することを得今日の境地に安住せり、之に依て老坂の新路を得たる略歴を記述し以て足下の厚恩を感謝す、寸間電覽を賜れば幸甚頓首三拜。

大正十三年六月上旬

七十四翁佐藤生

土屋上人足下

宗教坐談

(唐澤三昧會中に於て)

藤井貞邦

初日

雑念が起らなければ睡くなる。困う卒業ださうです」と笑はれる。上「やはり工夫を要しますね。つて中村上人に訴へると「決心がすると土屋上人が「尤も三昧と睡△「睡氣はさしませんが妄想が起つて參ります。努力すればする程妄想が起つて參ります

第二日

「自分では随分決心して居るつもりなんです」といふて居る處へ今朝から飯一杯に減食したら睡い上「さういふものです。△「それでよろしいのですか土屋上人が來られて「何ですか」とのは治つた。上「自力の念佛だからです。縫り問はるゝから「睡くてたまらない

第三日

さへすればよいのです。

△「其味が私にはわかりません。工夫にまたねばなりませんか上」さうです。わかつて居て傳へられませんか。

あなた大決心で來られたといふが何かつかんで歸らうといふ考ではいけません。捨てる考でなくは何よりも絶る工夫が大切です。自力でむちやな努力をすると身體をこはして仕舞ひます。自轉車を走らす様なものでむちやみに力を入れたからといつてそれでよく走れる譯には行きません却つて疲れる一方で駄目です。又米を舂く様なもの性急に荒くやれば米がこなれて仕舞ひます。

第四日

夕食前上人は婦人連を相手に話をして居られた。夫れは世人が見佛

だの靈感だのとそれのみを得たいとして、もがくのに對しての心得についてゐた。私もお仲間入りして暫く拜聴して居たが折を見

△「先刻の御法話によりますと念佛者が靈感をのみ目的とするのは學生で申ますと所謂點取虫に相當しますのでせうか

上「點取虫之は面白い例だ」といふて上人はニコ／＼しながら軽く合掌せられた。

禹善言を聞けば即拜すといふやうな事は聞て居たが今、上人がさうなく之をなされたので私は面喰つた。法話を結び付くべき聽者の經驗を尋ねて居らるゝ爲であらうと拜察した。さて上人は尙言葉をつゞけて「念佛のカニンングもある無信仰の僧侶の

說法はそれだ」といはるゝ。△「それならばなせ靈感とか見性とか云ふ事を力説して求導者をつまづかせるのでせうか

上「それは靈感とか見性とかいふものの概念をつかむからです

△「靈感の概念と申しますと

上「言葉の上の概念です。靈感とか見性とかいふことばにとらわれて、靈感そのものの見性そのものを得ることのできるやうに自分の靈化を願はぬからです。自分の信仰の充實を祈らずして見佛だの、靈感だのとさわぐのは恰も食はずして味を知らうとするやうなものでせう。

夜は坐談があつた。(老師と云ふのは中島觀琇老師のことである)。私はまだしかと念佛のわけが信ぜられませんがどうしたもの

せう。

上「私が求道時代の時であつた。

「臨終間際の來迎はおそいといふと」拜がめ今だつて出て見せるといふ。すると「マア出て見せろ信ずるからといふ。」かくまで有難いものがどうして信ぜられぬかといふから「精神作用で信ずりや有難くも思はれるさう云ふ。又」如何に罪深くとも念佛申せば救はるゝといふから「なせ念佛申さぬでも助けるといふ本願を立てなかつたか氣のきかぬ如來様だといふ。すると老師は「何と云つても本願を立て、仕舞つたのだから仕方がないと云はれた。眞宗では「如來様は地獄に落ちて行くお前方の先廻りをしてまでも助けようとして居られるのだといふ。すると」な

んだ足の遅い。ほんとにさうなら世の中に悪い事はない筈ではないかと云ふ。これ釋義論家の私も其後に至つて「阿彌陀様とあらうものが我々の考ふる事位考へて居られぬ筈はない我々の考へにも劣る程の愚ではない筈だ。して見れば念佛申す處に罪の除くる原理が宇宙にあるのではないか。今までの考は自分の屁理窟ではなかつたかと心づいた。それから遂に私は本願を中心として信ずる様になつたのです。」御名を呼ぶ聲に心の雲はれてさやかに見ゆる月の面影」といふ古人の歌があります。唱へさへすればよいのです之を経験して理窟が負けました。

丁「或る宗では如來様の救いさへ信ずれば、どんな行爲をしても

よいと申しますが如何でせう。上「淨土教を誤まると

さうも考へられます、都に遊學して居る放蕩息子が電報で親に金を請求する。父は放蕩の助けとなるに過ぎないからと云つて金を送らない。母は心配してそれでも泥棒でもすると困るから送つてやつて下さいと云ふ。送るも送らぬも共に親の慈悲でせう。それを息子はよい事にして金を取ることにかゝつて居る。恩知らずではありますまいか。友達が見兼ねて世間には苦學をする人もあるのに勿體ないではないかと諫めると息子は「なるほど有難い親なればこそ」と喜び。然ながら、親あればこそと喜び乍ら放蕩は止めない。放蕩して居れるのも親のおかげだとはし思ふのでせうか。

□觀道より

本月中の私の傳道日割

四日 上州高崎市研究部

七日 静岡市みのりの會

八、九日 同清水實相寺講演會

十日 道中

十一、二日 岐阜縣行基寺青年

在郷軍人會

十三、四、五日 四日市善光寺

十七、八、九日 神戸市生田町極樂

寺

廿、廿一日 尼ヶ崎市甘露寺

廿三日ヨリ 大阪市南區生玉寺

廿七日マデ 町長圓寺

○其後は未定

豫約募集

價値の宗教 土屋觀道著

右は今年の唐澤に於ける別時中の著者の話をやさしくまとめたものであります。案外に應募者も多いので總ふりカナ附きに致します。百八十頁位五十錢内外で紙も上等を用います。尙御用の方は本月中に御申込み下さい。それ丈格安に出来ま

すから、之をひとへに如來の慈光宣傳の爲めです。

申込所

東京市芝公園十四號九番眞生社
静岡縣清水港實相寺 中村辨康

寄贈並誌代拂込芳名

寄贈の部

○金五圓大竹智憲様石山よし子様

矢島春道様

誌代の部

○金五圓鎌倉大佛殿○金貳圓四拾

錢浦賀長安寺様○金貳圓石山よし

子様、横井しげ子様、中村乙子様

兵庫神崎西念寺様○金壹圓淺野戒

全様、長澤嘉一郎様、高橋定一様

畔柳明太郎様、大賀健造様、伊賀

屋貸本店様、柳作二郎様○金六十

錢小口ケサミ様○金拾錢藤森ハル

子様○金壹圓宗大生靜永様佐藤様

定價一部十錢 半年六十錢 一年一圓

振替口座東京四七二八八番 眞生社

編輯兼 土屋觀道

發行人 眞生社

東京市芝公園第十四號地九番

發行所 眞生社

東京市芝區三田四國町二番地三號

印刷人 三井清次

東京市芝區三田四國町二番地三號

印刷所 玄々堂印刷所